2012年度 **F B**

論　　述

注　意

1. 問題は全部で６ページである。
2. 解答用紙と下書き用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に縦書きで記入すること。
4. 解答用紙および下書き用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

次の文章を読んで以下の問に答えなさい。

問一　本文中の空欄 ① ～ ④ に入る言葉を、次の選択肢(ア)～(エ)から選びなさい。同じ選択肢を二度用いてはならない。

解答用紙(その一)を使用

(ア)　快楽的　　(イ)　禁欲的　　(ウ)　非対称的　　(エ)　文明的

問二　傍線部(1)について、筆者はなぜ宮沢賢治の『氷河鼠(ひょうがねずみ)の毛皮』を「予言のようではありませんか」と述べているのか。本文の内容にもとづいて百字以内で記しなさい。**解答用紙(その一)を使用**

問三　今日の社会が抱える「文明と野蛮」の問題に関する作者の見解を踏まえた上で、あなたの考えを八百字以内で述べなさい。その際に以下の語句を使用すること。「神話や儀礼、人間と動物、対称的な関係」**解答用紙(その二)を使用**

神話とは、ほんらい国家というものを持たない人々の間で生まれ、発達してきたものです。そこでは、人間と動物との間に越えることのできない溝などはなく、いつでも動物はその毛皮を脱いで人間のようにふるまい、人間のことばを語ることもできましたし、動物の性的魅力の虜(とりこ)になった人間の女性は、すすんで動物と結婚して、森の中に消えていくこともできたのでした。つまり神話という語りを通して、人間と動物の間や人間同士の間に、「対称的」関係が築き上げられていたのです。

神話を持つ世界では、人間は「文化」を持ち、動物たちは「自然」状態を生きていると考えられていました。「文化」のおかげで人間は、欲望を押さえ、節制した行動をおこない、社会の合理的な運行を維持する規則を守ったりしながら、動物にはまねのできない抑制のとれた生き方を実現できるのです。こういう「文化」を大切なものと考えていた社会の人間は、当然のことながら、自然やまわりの人間たちにたいして、きわめてエレガントな考えやふるまいをおこなっていました。近代の人々が「野蛮人」だとか「未開人」と呼んでさげすんだ人々は、じつは彼らを支配した近代人などよりもはるかに上等で優雅な「人間」だったのです。

神話を語っていた人々は、動物たちのことを「野蛮」だなどとは考えませんでした。動物たちは「自然」状態を生きていますが、そのおかげで動物たちは人間が容易に触れることも手に入れることもできない、「自然の力」の秘密を握っているのです。この世界の

真の権力を握っているのは、むしろ動物のほうなのです。人間はそこで神話や儀式をとおして、つまりは「最古の哲学」の思考様式をとおして、動物との間に失われた絆を取り戻し、「自然の力」の秘密に触れようとしていました。神話が語られた社会では、権力というものはそもそも人間のものではない、と考えられていたわけです。

ところが、そこに国家なるものが発生すると同時に、このような関係が崩れてしまうのです。国家を生きている人間は、「文化」を持つことを誇ると同時に、ほんらいは動物のものであった「自然の力」の秘密まで、自分の手中におさめてしまおうとしました。「文化」はほんらい「自然」との対称的な関係のもとで、はじめて意味を持つものであったのに、それがいまやバランスを失った「文明」に姿を変えてしまいました。そして、そのとき同時に「文明」と「野蛮」の違いが、意識されるようになったのです。

相手が動物であれ、人間であれ、その相手のことを「野蛮」であるときめつけ、それに比べて自分たちはなんて「 ① 」なんだろうとうっとりしたりする。こういう考えは、世界を構成しているものの間に、容易に崩れたりしない ② な関係があり、その関係を維持することは、人類の文明にとって「正義」である、という先入観がないと生まれてきません。こういう先入観は、人間が国家を持たないかぎり発生しなかったように思われます。神話的思考は、そういう先入観が発生しないための「哲学」として、大切な働きをしていたのです。

ところで、つい先々週(二〇〇一年九月一一日)のことですが、ニューヨークであの事件が起こりました。事件の直後から、これは「文明」と「野蛮」の戦いであるというような表現が、大声で語られるようになりましたが、これにはびっくりしました。あのすばらしく高度なイスラム文明を生きている人々のことを、まるで野蛮人扱いするような表現が、アメリカの人々の口々からポンポンと飛び出してきたからです。

二一世紀が、「文明と野蛮」の問題がクローズアップされる時代になるだろうとは、まえから予測されていたことです。今日の世界では、富を得たものと貧しいものとの差が、極端に大きくなっています。人類の中のごく少数の人々のもとにだけ、富を得るチャンスや仕組みが集中してしまって、圧倒的多数の人々には、そうした機構やチャンスに接近する可能性さえないのです。富の配分が、極端に非対称的になってしまっています。そうした世界は、自らテロを招き寄せてしまうでしょう。もちろんテロは「野

蛮」の行為にはちがいありませんが、またそれに対する報復攻撃も、ひとつの「野蛮」をあらわしています。現代の世界では、富の配分の不公平という形をとった非対称性が、さまざまな「野蛮」を発生させてしまっています。

ニューヨークの事件があった夜に、私がまっさきに思い浮かべたのが、宮沢賢治のことでした。人間の世界に、圧倒的な非対称の関係が築き上げられてしまい、それが対話や富の公正な配分を阻(はば)んでしまっているところには、しばしばテロが誘発されます。そんなやり方でなければ、おたがいの間に理解や対話を発生させる対称な関係がつくりだせないと考えた人々は、この「野蛮」な方法を実行に移すしか、ほかに手段を見いだせなくなってしまうからです。

宮沢賢治は人間の世界に、そのような状況を見出していたばかりではなく、もっと根源的には、人間と動物の間に、揺り動かすことさえ難しい絶対的な非対称の関係がつくりあげられてしまっていると見ていました。宮沢賢治は人間と動物を徹底的に分離してしまう考え方と、人間の社会に不平等や不正義がおこなわれている現実の間には、深いつながりがあると考えていたのです。そこで、彼はさまざまな作品の中で、利口な山猫や狐たちが、人間と動物との間の非対称をひっくりかえしていく、痛快な物語を語ってみせたのでした。

なかでも『氷河鼠(ひょうがねずみ)の毛皮』という作品には、いま世界で起こっていることの本質に深く触れている内容が、みごとに語り出されています。もちろんそれは近代の文学の作法にしたがった作品には違いありませんが、その物語を突き動かしているのは、まぎれもなく私たちにはもうなじみの深いあの「神話的思考」にほかなりません。近代にはすでに死に絶えたと思われていたその思考方法が、これほどまでにすばらしい表現に到達した例は、ほかではめったに見られません。この作品は形式において神話であるのみならず、語られている思想内容において、神話の精神をもののみごとに体現しているのです。

宮沢賢治がこの作品を書いた頃(一九二三年)、ベーリング海峡を挟む北方の世界には、まだたくさんの狩猟民たちが住んでいました。北海道とサハリンにはアイヌが、サハリンの北地方にはウィルタやニヴフ(ギリヤーク)がいました。対岸のオホーツク海に面したアムール川流域には、オロチやウリチなどの狩猟民がいましたし、さらに北にはコリャーク、アジア側ベーリング海峡のあたりにはチュクチが住んでいて、そのままベーリング海峡を越えると、文化的な連続性を保ちながら、イヌイットやアメリカ大陸

北西海岸のインディアン諸部族の豊かな世界が広がってきます。

そうした北方の世界では、夏の季節の間は、人間が生きるために狩猟をおこなって、動物を殺すのですが、冬の季節になると、こんどはその関係が逆転して、動物たちの王である精霊が、人間を食べてしまうという考えが、神話や儀礼を通して、あざやかに表現されていました。そこでは、人間がいつでも圧倒的な力で支配するのではなく、人間もまたほかの動物を食べたり、ほかの動物によって食べられたりする補食の連鎖の中に巻き込まれた、なんら特別な存在ではない生命の一員として、人間よりも大きな存在によって「食べられなければならない」という思想が、生きていました。

ところが、アイヌの世界を南限として、このような思想は語られなくなってきます。かわりに登場してくるのが、人間の生物圏における優位性を少しも疑わない人々です。この人々は、自分だけが食物連鎖の環から超越した存在であると思い込み、動物たちを自由に家畜にしたり、動物園に囲い込んだり、スポーツとなった狩猟で動物たちを殺してもかまわないと思うようになります。少なくとも、そういうことに疑いを持たない人間となるのです。

宮沢賢治はこういう近代人の象徴のような人たちを、『氷河鼠の毛皮』のなかで、まとめて「最大特急ベーリング行」の列車に乗り込ませているのです。彼らは防寒用の分厚いコートを何枚も重ね着し、動物が見たら震え上がってしまうようなピカピカに光る鉄砲をたずさえ、なんの不安も抱くことなく、列車の座席にからだを埋めて、眠りこけています。そういう人間たちの代表が、大富豪のタイチでしょう。この男はたかが友人との賭けのために、黒狐を九百匹も仕留めて、毛皮を手に入れようと、ベーリング行きの列車に乗っています。資本を持っていて、その資本を投資や利殖によって増幅させていくことのできる、近代のお金持ちの代表でしょう。

その列車の中に、ただ一人、貧乏な青年が乗り込んでいます。いかにも寒そうな粗末な黄色いジーンズの上着を着ているだけのこの青年は、ほかの乗客たちとの会話に加わることを拒絶して、じっと暗い車窓を眺めています。青年はどこか ③ です。お金持ちたちが心地のよい生活を追求しているのに、青年はそれに背を向けようとしています。

④ な生活は人の心を鈍くしてしまいます。その結果、この世界の奥のほうで繰り広げられている、残忍な光景が見えな

くなってしまいます。この地球上でごく一部だけが豊かで、安楽な生活を送ることができるためには、それよりもはるかに多くの人々や動物たちが、耐え難い苦痛や死を味わわなければならないのだという現実を、まなこを開いて凝視し続けなければならないと、この青年は考えていたのでしょうから、その心は車中の人々の会話などにはなく、はるか北方に広がる神話的思考の王国に、まっすぐに注がれていたはずです。

北方の白銀の世界に生きる狩猟民たちは、タイチのようなお金持ちの目から見たら、お話にならないほどに貧しい暮らしをしています。家といったら半地下式の竪穴(たてあな)住居ですし、食べるものだって家具だって粗末なものにすぎません。タイチのようなお金持ちは、そういう人たちを見るとかわいそうになって、厚い毛皮のコートを貸してあげようとか、援助物資をあげたらいいだろうとか思いつくものです。しかし、黄色いジーンズの若者はそういう親切な申し出にも耳を貸しません。それが貧しい暮らしだとは、ちっとも思っていないからです。それよりも問題なのは、豊かなものと貧しいものとの間や、人間と動物との間につくりあげられてしまっている、身動きもとれない非対称の現実に対してまったく無神経になっている、近代人の心のあり方です。

人間と動物との間になんとか対称的な関係を取り戻そうと考えていた、神話的思考に生きる人々は、しかしこの近代世界の中では、どんどんと悲惨な生活に追い込まれていっていました。そのかわりに、圧倒的な非対称で出来上がった現実になんの疑いを持つことなく、それが天地の道理だと思いこんでいる人たちのほうは豊かで、これからの楽しみのための狩猟に出かけようとしているのです。それは本質的な優しさを欠いた世界です。どうやったらそんな世界を覆したり、変えていったりすることができるのでしょう。

そこで、『氷河鼠の毛皮』では、北方の神話的世界の「王者」である白熊が、この状況に根本的な変化をもたらすために登場します。白熊はある大胆な行動を実行に移したのでした。テロリズムです。大きな力で押さえつけられて、どんなにしても自分たちの主張や思いをその理不尽な相手に伝えることができないときに、弱者はしばしばテロの手段に出るものです。白熊は北極圏の動物たちを指導して、理不尽極まりない非対称的状況を転覆すべく、列車を停止させて、そこへどやどやと乗り込んできました。無神経なまま、動物たちにとてつもない苦しみを与えている者を処刑しようというのです。

おそらく白熊たちの主張は、こうでしょう。かつては人間と動物の間には、対称的な関係がなりたっていた。もちろん人間のほうが技術の力でまさっているから、どうしたって現実には対称性などは実現できなかったけれども、まだ優しい心を失っていなかった人間たちは、神話や儀礼を通じて、人間と動物との間に対称的な関係を取り戻そうと努力を重ねていた。ところが、最近になると、人間たちはそういう神話の思考などを馬鹿にしはじめて、神話から脱却するのが進歩だとか吐(ぬ)かしたあげくに、動物に対する人間の支配を天地の道理のように考えるようになってしまった。われわれはかつて実現されていた、動物と人間との関係の復活を要求する。人間と動物の双方が寄り集まって、地球上に生きるすべての生命が発言の権利を持つ会議を持たなければならない、とわれわれは考える。しかし、ほとんどの人間たちは、動物たちが悲鳴のようなメッセージをいくら発しても、いっこうに耳を貸さなかった。そこでわれわれは、弱者に残された唯一の手段であるテロを実行に移すことにした。テロがよくないことぐらいは、われわれだってよく知っている。しかし、われわれをそこに追い込んでしまった人間たちのしていることは、もっと悪い。いまや人間たちは許し難い「野蛮」に陥っている。

(1)まるでこの作品は予言のようではありませんか。「最大急行ベーリング行」に起こった出来事は、まったく最近のニューヨークに起こった事件を彷彿(ほうふつ)させるではありませんか。地球上でもっとも豊かな暮らしを享受している人々は、そのことですっかり無神経になって、ほかの大多数の人類に、理不尽な非対称の状況を押しつけているのではないでしょうか。テロの行為は「野蛮」です。しかし、それを誘発したのは、別の種類の「野蛮」なのです。

(中沢新一『熊から王へ』より)